

# おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

令和2(2020)年  
**5月号**  
通巻597号  
毎月23日発行  
(題字 矢追日聖)

★発行日 令和2年5月23日  
★発行所 大倭出版局  
〒631-0042 奈良市大倭町1の12  
☎(0742)45-1192  
★印刷 大倭印刷製本  
★定価 1部 300円  
年間購読料3,500円(送料共)  
★郵便振替 01050-6-67002  
大倭出版局  
URL <http://www.ohyamato.jp>



カエデの若葉 (大倭大本宮拝殿)

奈良市 井手泉さん撮影

**再録** 『すさのお』紙より

## 庶民の生活に深く根ざした土着信仰 (全16回)

法主 矢追日聖

(十三)

昭和43(1968)年11月23日発行

『すさのお』第26号より

(法主、満56歳)

「神ながら」を主体とした信仰(原始神道、古義神道)の中で、その顕著なものの一つに山岳信仰がある。高い山を信仰するということであるが、高い山は全国至る所にあるけれども、それらの中で信仰する山は限られた特殊なものだけのようである。

山頂の夜明け、御来光を拝む気分爽快さ、その神秘感、下界の生活ではとうてい味わうことのできない魅力をもっている。

現在の若人でもこの辺までは理解できると思うが、この程度では山が信仰の対象になるまでは、まだまだかなりの距離があるようである。

人々が何かを信仰する時は、それは人毎に相異なるものであるが、何か自分に有利である条件を見出した時から始まるものである。山岳にも古木にも、或いはまた湖や井戸水にでも、それらにはそれぞれに働く気があるのである。

こうしたものから発する気を感じることができた人が、これらの気と調和して生活していた。こうすることが最も有利な方法となり、自然物が信仰の対象になっってしまう。

## 山の靈威と神奈備

山としてはごく低い登美の神奈備彌峯や三輪の神奈備三輪山等は、この地から発する靈威を感じた古代人が信仰の対象にしたものであるが、時は流れ、信仰する人が多くなるにつれて、彼らは神聖な地域を表示しそれを保護するために、何らかの営造物を設置するようになった。鶏峯東麓には大倭神宮があり、三輪山西麓には大和一ノ宮大神社(旧三輪寺)があつて広く庶民の信仰を集めている。

高い山では、駿河の富士山、越中の立山とならび日本三名山の一つに数えられている加賀の白山がある。現在まで信仰の対象になっているこれらの山々は、もとはすべて神奈備の性格をもつていたに相違ない。

昨年(昭和四十二年)十一月二十四日、北陸地方へ教導旅行に赴いた時には、白山を気にしながら参拝の機会を失った。

そして本年十月十七日の朝である。秋晴れに恵まれて、松任町西新町聖興寺にある千代尼塚に詣り、次いで白山水系の水を集めて日本海へ注いでいる手取川と鶴来町までさかのぼり、加賀一ノ宮として崇敬されている白山比咩神社へ詣つた。

神域は古色を帯びた杉の木立や椿、あすなろなどが鬱蒼と茂って森厳さをおもひます。社殿の両脇には、白山の水で育った新穀が、小さいビニール袋に入れて煉瓦のように積み重ねて奉納してあつた。

本殿には何もなかったが、ここは面白いことに社殿を取巻く古木に、丁度四隅に当たる位置に天狗さんがいて、このあたりの神域を護っていた。昨年、北陸教導のとき守護してくれた、白山から

来たという天狗は、実はここに棲まっていたので、笑いながら昨年のお礼を申し述べておいた。これは白山一円の天狗の総司であつたわけである。

白山へは登れないとききらめて、一応、ここから遙拝したところ、大龍神の喜びの挨拶はあつたが、白山の姿は山陰のため拝めないのが残念だつた。もとの神地だつたという安久瀧の森を感慨にふけりながら逍遙し、天狗橋の上に立つて白色に映える手取川の川原に引きつけられた。

夜の教導会場には宮本作次郎氏宅が当てられていた。大倭の家子である手取屋ふみの長男征夫氏の、妻君の実家がこの宅の筋向かいにある。彼女の父である山森敬三氏には今度万幸一方ならずのお世話になつたのである。特に公私多忙な神保徳久氏が万難を排してかけつけ、北陸方言をまじえ一言一句、力をこめた弁舌で、彼が見た大倭を飾りなく紹介されたことは誠に有難かつた。

### 仏教の母体としての神ながら

かつて下白山(白山寺、即ち白山比咩神社)は比叡山延暦寺の別院となり、白山衆徒は延暦寺の所管となつていた関係上、この地に起こつた一向一揆との戦いで白山衆徒は殆ど全滅したという苦い歴史もあるのであるが、その流れを汲んでいるこの地方の人々の心の底には、昔ながらの白山信仰の根強さが脈々として今も生きています。

こうした「神ながら」信仰の母体が、親鸞の教えを育て花を咲かせたものと思う。対談の中で「白山の水で育つたわれわれ」という、その言葉の中にも日本人の古い土着信仰の生命が強く印象的に響いてくる。

どぶろく祭りで賑わつていた鳩ヶ谷(岐阜県大

野郡白川村)で一夜を明かし、二十日の朝、近くの萩町にある合掌造りの集落を見て、高山へ向かう。雲は多かった。大牧ダムの湖畔を通り平瀬にかかる。午後一時三十分過ぎだった。左窓の景色を眺めると頭が右に向く。ふと前方を見ると橋が見えてその右側に立っている。「白山国立公園、登山口」と書かれていた標識が飛び込むように目に映つた。

急停車して近くの店で道の事情を聞いた。地道だが白水滝まで車で行ける、白山が見えるのは途中で一ヶ所あると教えてくれた。飛騨高原特有の秋の色を眺めながら、もうか、もうかと期待の胸はずませた大臼川峡谷をゆるゆると登る。

十分ほど走つた頃だつたらうか、急カーブにさしかかつたと思うと視野が瞬間に広く展開した。と同時に、大空をくまなく覆う白雲の前に御前峰、大汝峰の秀麗な姿がくつきりと浮かび出して、今にも頭上へおおいかぶさつてくる威圧を感じさせた。

ピンカープの鼻先に立つた。眼下には大臼川の奇岩累々と連なる中から、せせらぎの音が紅葉の間を縫うて囁く如くに伝わってくる。肝胆相通じたのかも知れない。無心に胸がつまり、涙がほと走る。

昭和四十三年十月二十日午後二時十五分、今世に於けるこれが白山との一期一会の尊き瞬間であつた。名残りはつきないので暫く撮影などして遊ばせてもらった。

十分ばかりたつと向かつて右方から徐々に雲が湧いてきて、裾から左へ流れながらやがて頂上をかくしてしまふ。丁度二時四十分だった。ねんごろな辞意を表して下山し、白山表登山口へ戻つたのが、三時十五分である。

高峰に雲がかかったり、晴れたりすることは、

近在に住む人々ならば誰でも経験することで、別段神秘でも奇蹟でもなく、それは只の自然現象に過ぎないことである。

## タイミングのよさに知る山の心

戦前だったが、改築中の熱田神宮へ詣った時に、私が拝んでいる間、前に垂らしてあった白布の御帳が前に浮き上がった。私の頭上で十分間程静止していたことがある。

また、昭和三十四年一月十九日だった。私にはこの日が、丁度十二年前、初めて大阪で街頭布教に立った記念日に当たっているの、愚妻と今井富藏苑長の二人と共に、生まれて初めて伊勢皇大神宮へ詣ったのであるが、この時も内宮の御帳が頭上まで上がったことがある。

この種の現象は、風がないのだから自然現象と簡単に片付けられない複雑性をもっている。けれども、所謂、霊峰と称せられる山々で私が経験した範囲では、そうした自然現象を起こさせるエネルギーが偶然、突発的にできたと思えない程、そのタイミングがあざやかである。私はそれを、人間の心に通じる山の心の顕われとして説明したい。

ほんとのことを言うと、白山に対しては手取川の方から挨拶は済ましているし、平瀬に白山表登山口があるなど思いもよらなかったもので、朝旅館を発つ時には予定には入れていなかった。であるのに現実には午後二時十五分、雲片一つかからない白山を拝むことになった。

いつも私が心を打たれるのは、このタイミングの問題である。若し十分遅くなっていれば、この機会は永遠に来なかったと思う。無計画な私達の動きに合わせて白山の方が計画されていたものか、それとも、逆に白山の計画通りに、私達は知

らず識らずに行動をとっていたものか私達には分からない。私が常に「無計画の計画」ということを口にするが、私の過去にはこうしたことがあり過ぎるのである。

山にはその山相応の心と動きがあり、人にもその人相応の心と動きがある。自然物に宿る心も人間に宿る心も、その根元は同じであるため、常にその心と心は相互交流して、何かの形で相互扶助の関係にあるものである。偉大なる霊威を顕わす山の心に接した人が古代にあったとすれば、その山は後々人々から崇敬され、今言う山岳信仰の形態をつくるものである。

この崇敬の心、態度が山の心に通じた場合は、必ず我々人間に対して、有利になるような自然現象が現われるものである。人生の幸せを願う心があるならば、先ず自然に対しては敬虔な態度で臨むことが肝要である。

## (十四)

昭和43(1968年)12月23日発行

『すさのお』第27号より

(法主、満57歳)

近頃になって私のもとを訪れる人々に、心霊現象やこれに関連性をもつ色々な事柄について、私の意見を求める者が増えてきた。それはテレビなどでこうした問題を取上げるようになった関係だろうが、それが日常の会話にまでのぼるような普遍性をもってきたからのように思えるのである。

心霊現象などのことは、本教で行っている月次祭の法話の中でも、或いは来訪者達に折にふれて話していることだから、改めてここで説明する

ほどの価値は無いと思うのであるが、こうしたことに對して認識不足であるとすれば、ややもすると取返しのつかない一生の不祥事を招く恐れも多分に含まれている危険性があるので、永年私が扱ってきた経験から、危険防止の意味で所信の一端を述べたいと思うのである。

断わっておくがこれは私個人の見解であって、私の言うことは絶対正しいと言信してもらっては困る。神憑りの人々、或いは靈感、霊能者という類の人々にも、その人がもつ個人差があるため、一律に見ることは早計である。参考までに心に留めていただければ幸甚である。

## 悪用の見本のごとき神憑り

この間、私はテレビに映っていた、或る宗教の拝んでいる実況を茶の間で見た。非常に面白かった。立派に凝らした衣装を身にまとった女の先生を中心にして、数十人の信者達が懸命な祈りをしていった。段々と熱が入ってくるにつれて入神状態の人が現われてくる。それは祭壇の最寄り、先生を主軸とした半円形に坐っている婦人達に限られているようだった。御題目は一つのリズムに乗って信者の口から大きくほとと走る。恰もそれは若き男女のゴーゴー踊りのムードと相通するものがあった。或る婦人は合掌した手を上手に振る、或る者は額ずいて大声を上げて泣き続ける、或る者は飛び廻る、或る者は愉快気に高笑いをする。このように雰囲気が高潮に達してくると、例の先生の活躍の場となる。

先生は発動している婦人の前で、腰をかがめ何かお経を唱えながら、日蓮宗が祈禱の時に使用する木剣をバチバチ鳴らして加持をしながら、何か聞き出している。先祖霊などが乗り移って何か訴

える様子だが、先生はそれに対して何か悟りを与えている。あとは納得した態度で静まってゆく。端的な言い方かも知れないが、見た目にはこの程度の受取り方しかできなかった。とはいえ現実社会の何処かですごした現実が実在していることは否定できない。

視聴者の一人である私は、テレビに映されたこの宗教行法について何ら批判する資格はない。勿論、この先生や信者達も知らないからであるが、私は今日まで、テレビで見たものと同じ形の入神状態に入った、幾多の人々を扱ってきた経験がある。今も大倭にはこの種の人々は多くいるのである。

下手な教化を受けている信者達は、入神状態や神憑りになった人に対しては、一般信者からは切り離された高位の存在のように信じ、更に神仏に近い人として尊敬の念をもつものだ。現世利益を主体とする宗教にあつては、教祖を始め上位の先生は大抵こうした人々の中から選ばれているのが普通のようなのである。

いつまでもだらだと、やれ神さんのお告げがあると、拜む度に先祖霊や或いは誰々さんの浮

かばれていない先祖さんが憑ってきたかという、こんな状態が長引けば長引くほど、それは下の下である。普通で一週間ほど、長くて二ヶ月、この程度で抜け切らなくてはならない。すかっと抜け切れた人であれば、そのあと霊感が非常に鮮明になり、必要とする場合は、予期しない時でもすぐ感じるようになる。

### 感応する人の程度に応じて出る霊示

先祖霊や狐狸蛇等の霊が乗り移ると信じている人は、いつかは精神分裂症になる素質をもっている。簡単に入神状態になれる人は、女性に多く、肉体そのものが宇宙の気に敏感に通ずるような仕組みに生まれ合っている。地上に実存するすべてのものは、それなりの気の働きをもっている。

自分を始め、すべての人間や鳥獣に至るまで、凡そ生きとし生るるもの、これらすべてに気があり、その気の働きには波長があつてすべてのものと交流している。我々がもつ想念も一つの波長であるから、見方によっては物質とも言える。

自分もつ波長は、先祖霊や狐狸の類の波長とも互いに感応性をもっているから、たやすく交流はできるが、その感応が自分で自覚できるということは、自分の肉体の五感(視・聴・嗅・味・触)・五官(目・耳・鼻・口・皮膚)を通してとらえているということである。

然し、まだ奥に五感・五官を司る神経があり、そのまた神経の根に、本能と理性の調和をとって動かしている気がある。若しこの調和が欠けた場合は、異常な人間になる。

若し狸霊が誰かに乗り移って色々喋ったとする。そう思われる場合がある。狸霊の気(霊波長)は確かにある。然しその気には、想念だけはあるが人間が使う言葉や表情、動作などはない。

お代さんになっている人は、現在意識外の所でその想念を受け、あとは自分で言葉に出し表情を作り、色々な動作をすることになる。同じ波長を受けても、その出方はお代さんによって千差万別である。これはその人の個性、教養、盲信的潜在意識、自己暗示、感応の程度等の総合演技に過ぎないのである。(つづく)

## 「神通力如是」の真意をさぐる 第七回 大倭教の源流にさかのぼって

じんずうりきによぜ

今回は、「神通力如是」の本文を先に進める前に、前回の第六回(3月号)で予告していた「本流」について述べていきたい。

それは法主によれば、太古からの大倭の霊界人たちの強い思いを、《世に「あらわし」て鎮魂する」という本流》ということで、まずは『ながそねの息吹』(野草社刊)の291頁からの文章を讀んでいただきたい。

《大倭として五十年、自分のお役目は何であったんかなと、今になって後を振り返って見てハッキリと分かってくるが、一番大きな問題は、大倭神宮の本当の霊地というもの、まず表に出すということが、私がこの世に生まれてきた第一条件なんです。

現在の大倭神宮の霊地は、昔、まあ昔といっても霊界では百七十二万年前とおっしゃるねんか

ら、我々の頭ではちょっと想像できない年代になるんですけど……、そのときからあそこに居られるのが奇稲田姫命さんなんです。まあ百七十二万年前というのは、それは霊界の話やと思うんですけど、まだ我々のような人類が発生していない、それ以前の年代やと思うんです。そこに霊的な人格としての霊だけが昔から存在しておったと思うんです……。

それが大和の出雲、三輪山のそばの出雲ですね、あそこで奇稲田姫命としてこの世に生まれて、いろいろの事情のために自分の元の本地、心の故郷である大倭へもどってこられた。そして人間としての奇稲田姫命さんは大倭神宮のあの土地で亡くなっておられるんです。大倭神宮が奇稲田姫命さんの終焉の地なんです。まあ島根の出雲では有名になってますけれども、終焉の地は本当はここなんです。

それと須佐之緒命が婿さんですからね。須佐之緒命さんと奇稲田姫命さんが結婚されて生まれてきた方が、饒速日命なんです。

その饒速日命は、大倭神宮のあそこでお生まれになっておるんですね。大国主命とか大己貴命とか、そういうような仕事によつての別名はついていきますけれども、本当のお生まれになったときの名は饒速日命なんです。

そして何百年か何千年かたった後の神武天皇の時代には、その人の子孫にあたる長曾根彦が大和の大王だったんです。

それで九州の方とのトラブルがあったんですけど、そういう意味で大倭神宮のあの場所は、日本民族の一番祖先の場所であるということなんです。先祖の神さん、つまり人格神を言うのに、天津神さん国津神さんという二つの名称があるんですけど、天津神さんというのは、これは全部渡来してきた、よそからきた神さんなんです。

《奇稲田姫命さんには八岐大蛇の伝説もありまされども、何かの事情でずっと西のアジアの大陸から朝鮮をわたって日本へきた須佐之緒命さんと一緒にあって、そして饒速日命さんがこの土地で生まれておるんですから、日本民族のご先祖さんというのは饒速日命なんです。今まではこのことは全部抹殺されてますし、現

在の日本人とすれば日本民族の祖先は伊勢神宮にお祀りしてある、伊勢が根本だというようになっておりますけれども、その誤りを私が言わなければならぬ宿命があるんです。

それは、いろんな学者によるいろんな学説がございまして、私がそんなことを言えば、戦前であればこれはもう皇室不敬罪ということになりますけれども、そういうような根本的に間違っておるところを正さなければいけないというのが、これが私の第一のお役目なんです。

大倭神宮は今でこそあんな小さな所でありませけれども、あそこが日本民族の本当のご先祖の土地であるということ、私が言わなければいけない、そういうような宿命をもっておるんです。》

※最後のゴシック体の言葉こそが、法主の言われる「本流」そのものであるが、その大倭神宮について、『ながそねの息吹』112頁の記者との問答では、

《記者 先生のお生まれになったところが、古代大倭の伝承地であることは理解できましたが、お話の大倭神宮はいつ頃から開かれたのでしょうか。

法主 簡単にいうと、社殿を備えた神社の形になったのは、推古天皇のときと聞いています。もとは鶏神社という名称だったようですが、後に大倭神宮と呼ばれたらしいです。

この地方が、神武紀元以前にはヤマトの中心であり、歴代長曾根大君の都でもあったところで、中でもこの神宮の地は靈威の最も顕著に発している神域ですから、古代人はこの地を神祭りの霊地として崇敬していたようです。

形の上では、伊勢は栄えて大倭は衰微するとうようになりましてね、時代の流れは面白いものです。

京都へ都が遷つてからというもの、かつて栄えた奈良はさびれるのと同じようにね。

神武天皇が都を、ヤマトの「ひろみ」(広湖。現大和盆地)の南に定められたため、古代から栄えた大倭はさびれてきたんですね。

民族祖神として天照大神を伊勢に祀られたので、民族信仰は伊勢を中心として行なわれていまして、その代わり、古代ヤマトの中心である大倭が忘れられていくということは、日本民族としては淋しいことです。

日本人の誰もが、この大倭とは大なり小なり心の結びつきがあるのですから。》

※とも語られている。

又、この本流を出す為の矢追家代々にわたる艱難辛苦があり、その一つの到達点が大正9年4月15日の隆藏氏(法主の父)の回心となる、遠山国子行者による大勧請として結実する。『ながそねの息吹』の「一大事の因縁」の章の91頁で、行者の言葉として、

《遠山 そうした中にな、兜率内院が空に浮いたように現われましてなア、その扉が開くと、神武天皇から歴代の天皇が揃っていはるのが見えましてなア、この神屋敷と歴代の日本天皇さまと、どんな深い因縁のある場所やうかと、しみじみ思いましたのや。おキシさん(法主の祖母)が生前に言うてはったことが、ほんまでしたんやなア。今日は天皇さまたちは、その時代の正装で整列し、祝杯をあげていやはったんでせ。今日はほんまにお芽出度い日だんねんなア。(略) (奇稲田姫命は)非常にお喜びになりましたなア、「この末法、正法の声を何万年待ったことか……」とおっしゃった(略)》

※等が記されている。

これらの事から、法主の言われる「大倭神

宮を世に出す」の意味するところは深く広い意義あるものと拝察できる。最後に同じく「一大事の因縁」39頁に語られている法主の祖母、キシさん（靈感者）の言葉を書いて、大正9年から本年4月で、ちょうど1000年を迎えた「箭負祭」のもつ意味を、皆様と共に今一度考えてみるよすがとしたい。

《幾万年という長い歲月の潤、わが大倭の大先祖さま達が、世にも顕われず窮錮しながら修練を重ね、顕われる『時』の来るを待ち給うている。その『時』が近づいたのか、何の宿縁か人間には分からないが、事實は我々がこの神屋敷に住まわねばならない事情となった。故に我々は、住まうからは神々の御心を慰め、御心に添い奉るよう精進しなければならぬ。切っても切れない縁というものがある。神々が窮錮なさっている御心が分かれば、我々も窮錮するのがあたりまえやないか。日本一の神地で住居を許された我々は日本一の幸せ者やないか。世間がどう言おうとも、庭が荒れても、家が傾いても、それが何やというのや。》

原文

十一月九日 午前八時半 於鳥見庄山

①「アーメ<sup>天</sup>メ<sup>細</sup>ノ<sup>女</sup>ウ<sup>命</sup>ズメ<sup>ノ</sup>ミ<sup>コ</sup>ト

コート、オンマエニテミ神楽ソウシナル、  
 磐戸神楽」立ツ、アー題目ニテ舞フ、  
 ②「キミガ<sup>若</sup>ヤー<sup>老</sup>ハー千代ニハ千代ニ  
 コトホギテ<sup>一</sup>幾千代マデモ<sup>一</sup>壽ギマ<sup>一</sup>ラツ  
 ラム」題目、、、アーアー題目、、、  
 マヒナガラ フシヲツケ  
 ④「大倭、鴉ノモリ<sup>一</sup>高天原ナルゾ<sup>一</sup>、

吾レ古ヘニ天照太神カクレマシ、世ノ中  
 ヤミニトナリニケル、吾レ神ヨリノ命ウ  
 ケテ、天戸磐根ヲオシアケルソノ為  
 八百萬<sup>ヨロズ</sup>ノ神等ガ集ヒマセルソノ前デ、  
 磐戸神楽ヲ奏シケル」  
 両手ヲツキ

「天細女命、奇稲田姫命ニオンモノ申  
 上ゲ奉ル、吾レ獨リノ計ヒニヨリオン前  
 ケガシ奉リ、オン詫ビ申シ上ゲ奉ル、ナ  
 ニトゾオ許シアレー」拍手、、、。  
 奇稲田姫命ノオ許シナク、奏セルニヨ  
 リ(妙月)足ヲトラレ倒サル。

註 釈

①アメノウズメノミコト(天細女命) 日本神話  
 ②五部神の神。天岩屋戸の前で踊つて天照  
 大神を引き出した(※『古事記』では、天照  
 大神を直接的に「引き出し」たのは、天宇受壳  
 命ではなく、手刀男命とされている)。

アメノウズメの踊りが『古事記』でどう描かれ  
 ているのか、現代語訳で引用してみよう。

《天宇受壳命(アメノウズメノミコト)が天の  
 香山に生えたヒカゲノカズラをたすきに掛け、  
 マサキノカズラを頭に巻き、笹の小枝を手にし  
 てさやさやと鳴らし、天の石屋戸の前に空の樽  
 を伏せて置いた上に乗ってどんどんどんどこ音  
 を立てて踏み鳴らした。

更に天宇受壳命は神がかりになって、乳房を  
 もろ出しに出して、着物の紐をホトのあたりま  
 で押し下げて舞う。

その場に集まったありとあらゆる神々が大笑  
 いに笑い、その笑い声に高天の原もどよめくほ

どだった。》(池澤夏樹訳『古事記』河出書房新  
 社の59頁)

②磐戸神楽 天照大神の天の岩戸に籠らせ給ひし  
 時、天の岩戸の前に於いて天細女命の奏せし舞  
 楽。『大辭典』平凡社)

「岩戸の神楽」は、大倭教聖歌「くにのもと」  
 第五節の最後の行にある。これについては、註  
 釈文の最後で少し深く考えてみたい。

③立ツ 法主の前で妙月に憑依したアメノウズメ  
 ノミコトが磐戸神楽を始めるため妙月が立ち上  
 がる。

④大倭、鴉ノモリ<sup>一</sup>高天原ナルゾ<sup>一</sup> 高天原をタ  
 カマノハラと読むのは広く知られており、「日  
 本神話で、天つ神がいたという天上の国。天照  
 大神が支配」(『広辞苑』岩波書店)というの  
 が通常の高天原に対する解釈であるが、ここで  
 いう高天原では幽界(靈界)は顕界(現界)と  
 分離してしまっている。

しかし、大倭では顕幽は不二であり、それが常  
 に還元帰一し回向していると説かれている。

『加美のまにまに』(大倭教教務本庁編集で昭  
 和44年発行)には「実体のある所(註・靈界)  
 を太加天腹といい、現世、現身はその実体を写  
 した影の世界である」とある。

なお法主は大倭教立教の後には、言霊としてのタ  
 カマノハラを太加天腹と表記されている。本紙  
 今年度1月号の表紙写真「神集いの靈界」を参  
 照されたい。

⑤天戸磐根(岩根) 『広辞苑』(岩波書店)に  
 よれば、「岩のねもと。大部分が大地に埋もれ  
 て固定した岩」のことである。つまりこの岩  
 戸(天戸)というのは、どっしりと大地に根  
 を張って容易に動かしがたいものであること  
 を表現している。

『加美のまにまに』の中にある「固有霊へのお祈り」に「豊葦原の中津国大倭鳥見の郷なる須加谷岡の底津岩根に大宮柱太敷立たて永久に鎮座坐す掛巻も恐ぎ太加天腹大神の磐座に……(後略)」と法主は「底津岩根」に言及している。

⑥足ヲトラレ倒サル(ここ何回かの△神通力如是)の真意をさぐるの中で、倭姫が奇稲田姫に対して礼を尽くした態度で行動しているのを見てきたが、天鈿女は奇稲田姫に許しを請うことなく、「磐戸神楽」を舞ったのだが、霊界の厳しい決め事を無視したことになり、妙月が倒された。

▼註釈文を考えながら気付いたのは、天鈿女が唐突に妙月に憑依して名乗り始め、奇稲田姫に叱られてまで、その御前で古の舞(磐戸神楽)を披露した意味は何だったのか。それにはまず「磐戸神楽」の意味を理解する必要がある。

その答えは、昭和41年3月23日『大倭新聞』第19号の「古代日本への招待」にあった。野草社刊『やわらぎの黙示』所収、その254〜256頁。

《編集部 『古事記』にでてくる天の岩戸開きというの、どういうことをあらわしているのでしょうか。

法主 端的にいえば「笑う門には福来る」ということです。人間の生活には「笑う」ということが非常に大事ですね。だから笑うことのできる人間というのは、一番神さんに近いともいえるんです。笑うということは、言葉からいえば、心の塵をはらうということでしょう。

心の塵、汚れをはらって、はらった残りを洗う。「はらう」と「あらう」をくっつけたら「笑う」

になりますね。人間の心の汚れ、垢をはらうて洗ったら、自然に笑えてくるでしょう。

それを一番具体的にあらわしたのが、天宇受売命(あめのうずめのみこと)に、ストリップして踊るということになったんですね。

編集部 というと、何を意味していることになるんですか。

法主 あれは言葉と陰陽一体の理というものをドラム化してあるんです。天照大神が岩戸へかくれたでしょう。

編集部 闇になったわけですね。

法主 言ってみれば太陽が西の彼方へ沈んで、闇になったようなものでしょう。どうしたらその夜の闇をはらいのけられるか、ということはどうしたら世の中の汚れというものをはらえるか、ということでしょう。そこで、笑うという状況にもついていかなければならないということになるのです。社会を動かす力をもっているのは男性やから、男性から笑いをひきだすには、女性が笑わす原因をつくらなければなりません。

そのために踊ったんですね。ストリップやったんです。そして、ワツと笑いがおこったんです。ということは、笑いの原因は踊るということでしょう。言葉からいけば、踊るとい言葉で、「お」は「心」ということ、「心から」「真心から」ということです。踊るといのは、やまと言葉でいうと「お足る」です。「足りる。足る」ということなんです。読みくせで、夕行の変化で、「おたる」というのが「おどる」になったんです。

自分の心が十分満足するというのが「おどる」の言葉の語源なんです。

編集部 そういうことになってくるんですか。

法主 昔から言うでしょう。「女ならでは、世の(平凡社『大辭典』では、夜の)あけぬ国」とか。

それが岩戸開きの原理ですね。家庭でも同じことですよ。

奥さんのことを「おかみさん」というでしょう。

「お神さん」ですよ。一番偉いんです。(略)

そやから奥さんがしっかりして家の中でストリップでもして主人の帰りを待ってるような心境でいたら、家の中の岩戸開きですよ。そういう家は栄えますね。》

▼この法主の言われる「磐戸神楽」の意味を受け止めたうえで、註釈文②にあるように、聖歌「くにもと」の第五節の最終行とのつながりを考えることにする。法主は時々聖歌が解れば大倭教が解ると言われていた。(ここで聖歌の歌詞の全部は書けませんが)

〈神通力如是)の真意をさぐる(第一回に「妙法によって世界を立直し神代の再現を譲り玉ふ。」とあるが、これは昭和16年11月ごろの世界であった。

聖歌「くにもと」が世に出されたのは昭和20年8月15日以後のことである。同じ頃出された聖歌「あけぼの」第二節に「濁り世の 岩の戸びらを 押し開き 本津日の御子 すくいぬし……(後略)」とある。(ここでは日の聖の出現を喜ぶ歌となっている。

「くにもと」の最終行「踊れよおどれ岩戸の神楽」と歌われているのは、生駒山に夕日沈むころ、春日野に満月が見える地、大倭大宮(紫陽花邑)は我等の楽土、六合基であるということ。

この悠遠の神代ながらの地に集う諸人に対して、こころ満ち足りて岩戸の神楽を踊りましょうという。これが大親元の霊界諸人の願いでもあるでしょう。

# あじさい日誌

4月15日 大倭神宮で午後2時から箭負祭が行われました。

この日は法主さんの父・矢追隆藏さんと神宮の守護霊・御嶽坊大僧正(後、鴉嶽大加美)が一体となって大倭鴉嶽社を新たに大倭神宮として出発された記念日であり、その大正8年4月15日からちょうど百年となりました。

4月23日 大倭大本宮月次祭。この日は昭和44年4月23日の法話をお聞きしました。前月号『おおやまと』に「御魂鎮めすることの意味」として掲載分。

祭典後、大倭会役員会の予定でしたが、新型コロナウイルスのため中止、会計報告等は書面で行うことになりました。

4月28日・5月7日 教務本庁で午後2時から本紙編集会議。

5月6日 大倭神宮月次祭。夜、大倭会館で邑倭の会。

5月8日 埼玉県熊谷市の梅澤

## 第346回大倭会文化行事

「布留の神奈備 石上神宮と天理参考館」方面へ

6月21日(日)の予定です。  
4月号の案内をご覧ください。

好弘さん(大倭会会員)が帰幽されました。この日、午後3時15分頃、かねて入院中の病院で今、息を引き取りましたとのお電話……。本年2月号の「寸紗」に登場して頂いたばかりでした。誕生日が昭和26年8月20日とのことで、満68歳。

5月9日 交流の家のF.I.W.C定例委員会は4月18日の予定をこの日に変更していたが、さらに6月13日に延期しました。

5月10日 社会福祉法人軽費老人ホーム大倭滝の峯荘(奈良市千代ヶ丘)の49周年記念日でした。こは、法主さんの実家を継がれた弟の隆義さん夫妻によつて、父・隆藏さんが福祉のためにお金を使うなら土地の売却に同意された、その意を汲んで奈良県最初の軽費老人ホームとして設立されたものです。

なお5月10日は、法主さんの祖母キシさんのご命日です。大倭安宿苑では5月10日 法人成立64周年の記念日。記念式典の開催は中止、守護神である成謙坊大善神にご挨拶のみ行い、永年勤続者の表彰状も各施設で手渡し、あじさいの箱の皆さんへの感謝状は郵送等。施設毎にご馳走メニューでお祝いしました。

(菅原園)  
4月26日 プロジェクターでネコカフェとデイズ二の映像を流しました。

(須加宮祭)  
4月14日 5月にちなんだ壁紙を作成しました。(長曾根寮)

4月16日(デイ)鯉のぼりの作品づくりをしました。  
4月23日(特養)7名(内喜寿と米寿が各1名)の方の誕生会を行いました。(茂毛路園)

5月10日 昼食はオードブル形式で創作料理でした。(八重垣園)  
クラブ活動も中止の中、5月に入り気持ちの良い日が続いて何よりでした。

◆故郷と俳句と私  
岡山県真庭市 湯浅芳郎

かつて広島平和公園の近くに泊った。早朝、原爆ドームの裏側の小さな通りの「G線」と言う喫茶店でモーニングをとった。この界限は「猿楽町」と言い古い町で色々な店が肩を寄せ合い暮らしていたが、あの原爆で人々も家もすべてが一瞬の内に吹っ飛んでしまった。今は小さな説明板があるのみである。

水が水追いかけて落ち神の滝(落差110m)、「星山」と言う山から落ちて来る。お猿さん

も160匹ばかりが愛嬌を振りまいている。  
源平を共に祀りて沙羅の花

岡山県南部の瀬戸内海で謡曲「藤戸」の舞台。昔を偲ぶ沙羅の花(夏椿)が咲いている。平家は、この地で源氏に敗れ西海の壇ノ浦に落ちて行く。



倉敷市藤戸寺

◆神奈川県横浜 野本三吉

『おおやまと』4月号いただき、ゆつくりと読みました。法主さんの語り口もやさしく、肉体をもつものと、ないものとの交流、シツクリと入ってきた。今やれること、肉体がある時だからできること。もう一つの世界と交流しつやつやっていいかと再確認しています。長島愛生園の方の絵、若き有宏さんの生き方もスーッと入ってきました。ありがとうございます。又、伺います。

# あんない

\*月次祭(大倭神宮)  
6月6日(土) 午後2時より大倭神宮にて。  
\*大倭会主催第617回観会  
6月14日(日) 中止。6月は12月とともに大観ぎの月です。各々の場所で心掛けましょう。

\*月次祭(大倭神宮)  
6月15日(月) 午後2時より大倭神宮にて。  
\*月次祭(大本宮)  
6月23日(火) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

編集後記  
▼「神通力如是」の連載もとうとう1年を越えました。これは昭和16年に法主様が記録された霊界のお話で、読者のご理解の一助として註釈もたくさん入れたので、かえって読みにくい面もあるかも知れません。じっくりお付き合い下さればありがたいです。

▼『おおやまと』紙とは直接関係ないのですが、昨年1月に帰幽された見田暎子さんの追悼文集の編集が進められています。文集のサブタイトルは「旅するように生きて」で、見田さんご自身の筆による旅の記録もたっぷり入っていて、読みごたえのあるものになりそうです。楽しみにして下さい。(T)